

溝越 理彩（みぞこし・りさ） 長崎県立佐世保北中学校3年
作品名 「心の声」と「自分らしさ」を大切に
読んだ作品 『海と毒薬』

幼稚園の頃、両親から遠藤周作文学館に行ったことがあるという話を聞きました。母が『沈黙』の舞台を観たことや映画の話も記憶にあります。自宅の本棚に『沈黙』という分厚い本が飾ってありました。幼い頃の私にはとても難しく、読み進めることができませんでした。遠藤周作さんという名前だけは知っていたので、いつかその作品を読みたいと思っていました。この夏、書店で本の物色をしていると、『海と毒薬』というタイトルが目にとまりました。薄い文庫本でした。裏表紙には「外国人捕虜の生体解剖実験に関わった忌まわしい過去、病院内での権力闘争と戦争を口実に、生きたままの人間を解剖したのだ……」と書かれています。一緒にいた母からは、実際にあった人体実験を題材にしていると思うが、その本を購入するのかと尋ねられました。偶然に見つけた遠藤周作さんの作品です。この時には、薄い本なので簡単に読み終えると思い、すぐに読み始めました。

この本は、日本人について、また人間についても考えさせられ、心に重く響く一冊でした。戦時中で、人の命に対する人々の感覚が麻痺していたのかもかもしれませんが、あまりに酷い、そしてその行いはとても醜いと思いました。多くの人々から信頼されている大病院での医師や看護師の行動に私は驚愕しました。彼らは人々の命を救い、誰よりも命の重みを知っているはずなのです。それなのに手術の失敗で患者を死亡させたことを隠し、術後の経過が悪くその後に死亡したかのように装います。「後始末をつけなければ」と一人の医師が言い、周りは何も言わずに従い始めます。「家族には手術の経過を一切言わぬこと」「患者は死んではいない。明朝、死ぬことになるんだ」という医師の言葉に私は心底驚きました。捕虜に実験を行う前には「奴等、無差別爆撃をした連中ですよ。西部軍では銃殺ときめていたんだから、何処で殺されようが同じことですな。」と医官が言いました。人間が人間に対してこんなにも残酷になれるものなのかと愕然とするともに、実験を誰も止めようとも辞めようともしない状況に心の底から怒りがこみ上げてきました。組織の中ではこのようになるのかと人間の弱さにとっても悲しい気持ちにもなりました。最後の場面では「あの捕虜のおかげで何千人の結核患者の治療法がわかるとすれば、あれは殺したんやないぜ。生かしたんや。人間の良心なんて、考えよう一つで、どうにも変わるもんやわ」と一人の医師が言いました。実験に関わった人たちはそれぞれに感じ方や心情は違っていますが、集団の中の人間の行動の恐ろしさが伝わってきました。一個人としては実験を止めることが難しいとしても、自分が嫌だと思うのなら関わることを断ることもできたはずだと思います。どの人もそれさえもしなかったことに嫌悪感を覚えました。戦時下という時代背景だけではなく、集団の中での強制する力、同調圧力のことをよく聞きます。自分自身の心に嘘をつき、同調圧力に屈して、後に後悔することは今の時代にもあることだと思えます。

実験の前夜、二人の医師の会話では「神というものはあるのかなあ……人間は自分を押し

ながすものから……どうしても脱れられんやろ。そういうものから自由にしてくれるものを神とよぶならばや」もし、登場人物たちに信じる神がいたら、それぞれの関わり方や判断は変わったのかもしれない。「さあ、俺にはわからん」「俺にはもう神があっても、なくともどうでもいいんや」と、あっさりと終わります。自分の生き方は自分で決めないと、そのことを一生引きずりながら生きていくことになってしまいます。登場人物の中にはそういう心の声が伝わってくる人もいました。

私は小学生の時から、人権やジェンダーについて、関心を持っています。日本人は周囲の雰囲気や他人からの見え方を気にして、多数派の中に身を置くことがよくあると思います。日本人が集団主義かどうかはわかりませんが、偏見や間違った認識が多数派になっていくと、いじめなどにもつながることもなるのだと思います。また、本のように多数派の中の人の心も傷つける場合があることにも気づくべきだと思います。今の私には、世の中のことを知り、どうすべきかを自分で考えていくことが重要だと思っています。まずは自分から、多数派に迎合することなく、自分の考えを持ち、自分が正しいと思うことや自分がしたいと思うことをする、価値観の違う人に対して、否定したり、自分の価値観を主張したり押しつけるのではなく、ひとりひとりが、お互いの違いを認め、相手の価値観を尊重する姿勢を持つことが大切なことだと思えます。『海と毒薬』の登場人物たちのようにならないよう、そのことを意識して発言や行動をしていきたいと思えます。